

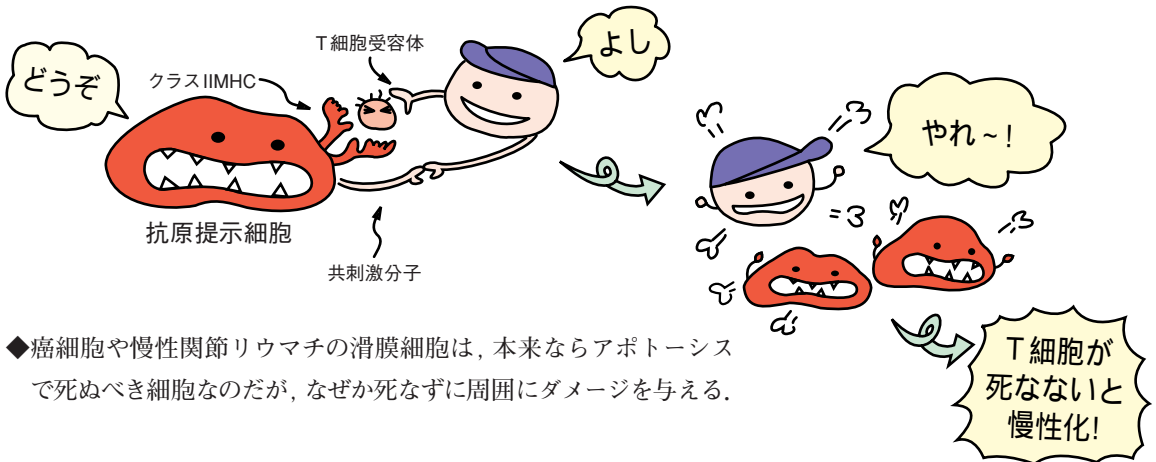
第7回

アポトーシス物語 その3 . 死の異常と疾患

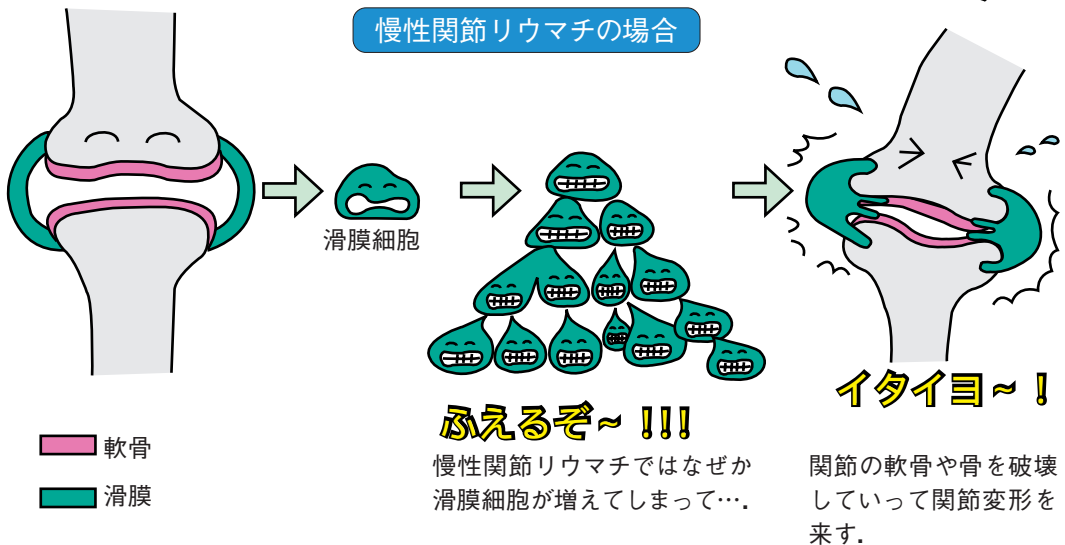
萩原 清文*作 多田 富雄**監修

アポトーシスという細胞の死が生命現象を支えている。当然、その異常はさまざまな病的事態をもたらす。

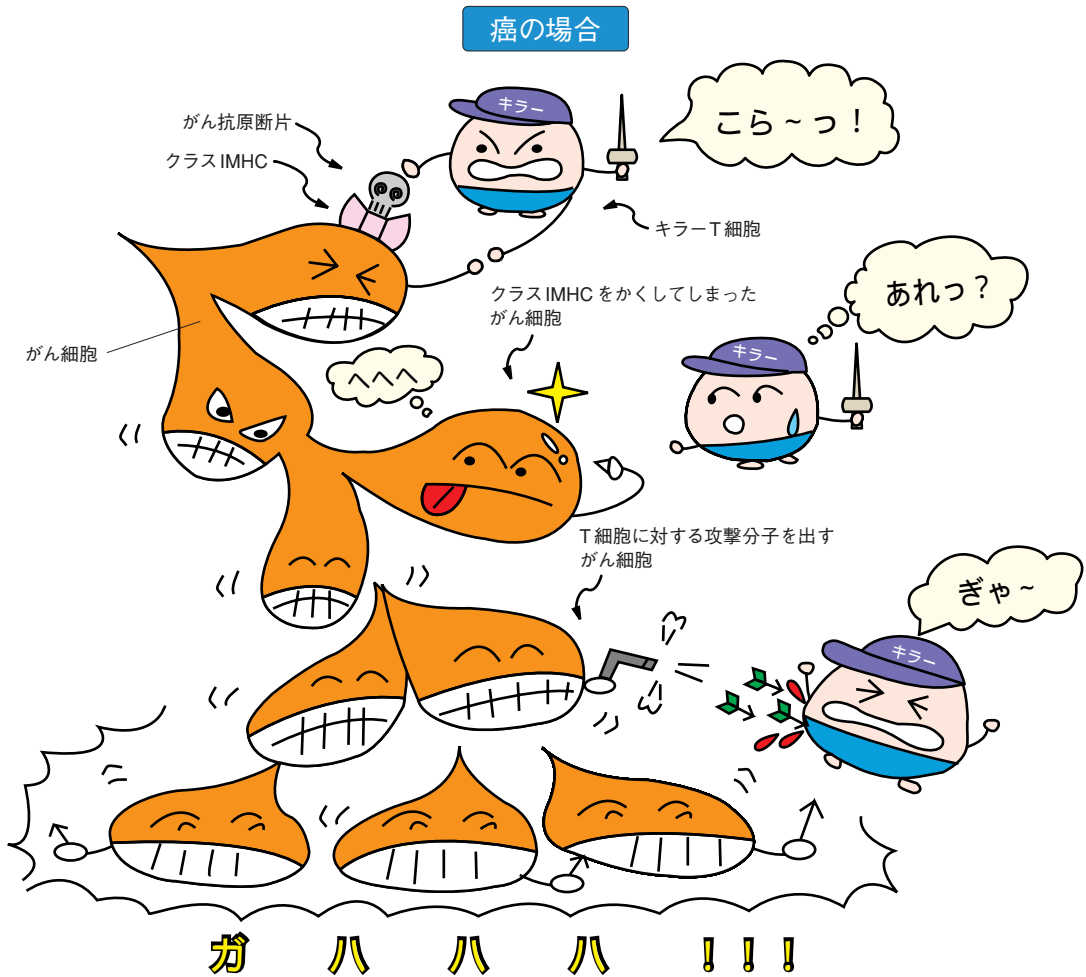
◆たとえば本来なら外敵と戦い終わったら潔く死ぬべきT細胞（前回参照）が、いつまでも死なないと炎症は慢性化する。



◆癌細胞や慢性関節リウマチの滑膜細胞は、本来ならアポトーシスで死ぬべき細胞なのだが、なぜか死なずに周囲にダメージを与える。



* 東京大学医学部アレルギー・リウマチ内科
** 東京理科大学生命科学研究所々長



- ◆細胞の“生き過ぎ”だけでなく“死に過ぎ”も病的事態をもたらす。エイズにおいて、免疫反応の司令官であるヘルパーT細胞はなぜかアポトーシスが異常に亢進する。つまり“死に過ぎる”。アルツハイマー病やハンチントン舞蹈病などの神経変性疾患においても、神経細胞のアポトーシスの異常亢進による“死に過ぎ”を認める。細胞は生き過ぎても死に過ぎてもいけないのである。